

かまにし

第29号

発行集 わがまち大田蒲田西地区推進委員会
地域情報紙編集委員会

投稿
お薦めの時代小説「居眠り磐音
江戸双紙 佐伯泰英」

主人公、坂崎磐音（いわね）は関前藩中老の嫡男としてその将来を嘱望されていたにもかかわらず、守旧派の謀略にはまり人生が大きく変わってしまった。

磐音は、三年間の江戸勤番を終え、朋輩の河出慎之輔、小林琴平とともに国許へと帰参した。三人は江戸で剣の腕を鍛え、経済の新しい潮流を学び、藩政改革の希望に胸を膨らませていた。三人は幼馴染でもあり、特別な絆に結ばれている。慎之輔の妻・舞は琴平の妹であり、その妹の奈緒もまもなく磐音と結婚することになってい

た。だが、磐音ら改革派を疎ましく思う藩の守旧派が仕掛けた罠に嵌る。慎之輔の妻・舞が不貞をしたかのようなデマが流され、噂を信じた慎之輔が舞を手討ちに、妹を殺された琴平が慎之輔と流言を発した男を斬ってしまう。腕の立つ琴平を誰も捕らえることができず、ついに磐音に上意が下り、やむなく琴平を討ち取る。磐音は許婚の奈緒にも顔を合わ

せず、心の傷を抱えながら江戸に戻り深川・金兵衛長屋で浪人暮らしを始める。職無しの磐音を心配した大家・金兵衛の紹介で両替商・今津屋を訪れるが、偽の南鐘二朱銀を持ち込んだ悪党一味を撃退し、これが縁で今津屋の用心棒として雇われることになる。そして金兵衛の娘で、今津屋の女中頭・おこんとの運命の出会いとなる。やがてこの偽南鐘二朱銀事件は思わぬ方向に進展し幕府の内紛をさらけ出す。

「居眠り磐音・江戸双紙」は、佐伯泰英作品の中でも代表的な傑作といえる。第一巻「陽炎ノ辻」2002年（平成十四年）の刊行以来、すでに二十六巻、名実ともに書き下ろし時代劇の大ベストセラーシリーズの地位を揺るぎないものとした。

春風のように穏やかで思いやりの深い青年武士磐音と、江戸下町の人々との心あたたまる交流。悪を斬り捨てる磐音の剣さばき。胸をしめつける男女の心の機微等々。長編時代小説を読む喜びを満喫させてくれる。巻を重ねるごとに、二度、三度と読み返す読者が多いのも頷ける。お薦めの一品。

（ペンネーム にゃんぱば）

事務局からのお知らせ

今年の七月一日、蒲田西特別出張所内に「区民ギャラリー蒲田西」がオープンいたしました。

出張所の一階ロビーに、区民の方々の絵画や写真、書などの作品を展示しています。皆様の活動の紹介の場として、また、作品の発表の場として、お気軽にご利用ください。

展示期間は一ヶ月間で、展示月前月の十日からお申し込みを受け付けます。ご利用は無料です。皆様の素敵な作品を、お待ちしております。

また、出張所にお越しの際には、ぜひ区民ギャラリーにお立ち寄りいただき、作品をご鑑賞ください。



「お詫びと訂正」
*かまにし17第28号4ページ3段目「谷千仙吉」は「谷口仙吉」の間違いでした。お詫びして訂正いたします。

わがまちの顔

フルマラソン ナンバーワン！
ランナー 中野陽子さん



西蒲田六丁目在住、普段は西蒲田五丁目洋裁店「アトリエ愛」を営んでいる中野陽子さん。その彼女を知ったのは、ランニング雑誌「ランナーズ6月号」掲載のフルマラソン公認記録成績集、「一歳刻みのランキング年齢別」で女性71歳部門での全日本No.1の成績を目にした時でした。

もちろん他部門には各年齢ごとにオリリンピック選手でもある野口みずきさんや中村友梨香さん、高橋尚子さん、渋井陽子さんなどのトップアスリートと共に最上段に名前が刻まれています。中野さんは運動が大好きで、若い時からスキーを始め、イン

ストラクターの資格を持つ実力！スキー暦は50年。そのスキーで鍛えた体は、当然マラソンにも応用ができました。

でもマラソン暦は2年足らずの経験と言っておられました。なんと今回の記録に載るほどの腕前でした。昨年、10月沖縄県久米島でのマラソン大会（42・195キロ）を完走、4時間7分19秒、この記録が公認されました。

フルマラソンと言うと、蒲田からならば北へは大宮まで、南ならば茅ヶ崎までの距離がそれに相当します。電車に乗っても1時間は有に掛かるところを中野さんは自分の足と体力で4時間余りで走りきるわけです。

走ることに関しては初心者でしたが、その鍛え上げた体が結果を出しました。難しい規則やルールがあるわけではありませんが、独自の体調管理と無理のないトレーニング方法、走るだけといえども、中野さんはプロのランニングトレーナーからア

編集後記

今回の「わがまちの顔」で取り上げた71歳のランナー中野陽子さん。いくつになっても挑戦し続けるパワーに脱帽です。

投稿記事では、長編時代小説のご紹介がありました。秋はスポーツや読書にいい季節です。皆さんも、スポーツや長編小説に挑戦してみてくださいいかがですか？

情報紙に対するご意見やご感想、また投稿などを事務局までお寄せください。

事務局 蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七十一番二七
(三七三二) 四七八五

ドライブを受け、基礎トレーニングから新たに始めました。練習は普段から軽めのジョギングと、週末には多摩川河川敷で二子玉川まで折り返しの20キロ走行など、月間で200キロぐらいを目標に走っているとのこと。

マラソンの動機は健康を兼ねての走りから始まり、今では走ることを通しての楽しさ、趣味でもあった旅行とのコラボレーションで、マラソンの目的（地方大会出場）を折り込んで、旅行の計画を作ります。旅先でのランナー同士の交流、沿道の地元の方々からの応援で、元氣と勇気を受けてゴールテープへと導いてくれる楽しさ！記録に残すこともできましたが、走り続けられる健康な体と、旅での出会い、多くの人とふれあえる楽しさが、今では宝物で何よりも嬉しいと、満面の笑顔を見せてくれました。

長寿社会の現代、中野陽子さんの限らない挑戦に私たちもそして世代を越えて、勇気と自信を頂いたと思います。これからの健康に留意して頑張ってください。

（取材 伊藤・大平委員）

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29,878人
	女	27,242人
	計	57,120人
世帯	30,662世帯	

平成20年8月1日現在

おめでとう！ 東急池上線開通八十周年

わが町のタウンシヤトル

私たちが毎日生活しているこの蒲田西地区、そのど真ん中を貫いて走っているのが池上線と東急多摩川線です。都内の私鉄としては、いまだき珍しい三両編成の短い電車で、走行区間も乗ったと思うと間もなく終点に到着してしまうほどの短い距離



現在の東急電鉄蒲田駅

です。(池上線は蒲田―五反田間一〇・九キロ、東急多摩川線は蒲田―多摩川間五・六キロ)

まさに東京のローカル線といった感じですが、それだけにまたわが町のタウンシヤトルとして地域の人々に親しまれ続けています。蒲田西地区には、東急蒲田駅のほかに蓮沼駅(池上線)と矢口渡駅(東急多摩川線)があつて、東急蒲田駅から御園中学校辺りまでのごく短い高架区間を除き、ほとんどが地上を走っています。そのため踏切が多いという難点がありますが、いちいち駅舎の階段を上り下りしなくても済み、すぐホームにたどり着けるといふ気軽さがあります。今回は、わが町のタウンシヤトル、池上線、東急多摩川線の特集しました。

歌にも歌われて

三十年余り前(一九七五年)に西島三重子さんという歌手が「池上線」という歌を歌ってヒットしたことを覚えている方も多

八十五周年?の目蒲線、八十周年の池上線

です。これは欧米各地を視察見学した渋沢栄一が東京(現在の田園調布一带)にも高級住宅地をつくらう、と計画したもので一九二二年(大正十一)には鉄道部が分離され、「目黒蒲田電鉄株式会社」が設立されました。これには関西で宝塚の住宅地を開発しそこに鉄道を敷いた小林一三をはじめ、かつて鉄道院の官吏であり、当時は武蔵野電気鉄道の常務であつた五島慶太など、そうそうたるメンバーが名を連ねていました。



昭和30年当時の東急線蒲田駅

一九二三年(大正十二)三月に目黒―丸子(現在の沼部)間が開通し、さらに、関東大震災後の同年十一月、丸子―蒲田間が開通し目蒲線として通し運転が始まりました。現在では、蒲田―多摩川間の東急多摩川線と多摩川―目黒間の目黒線に分けられてしまつていますが、もし今でも通し運転をしていたら八十五周年にあたります。一方の池上線のほうは、一九一七年(大正六)に設立された「池上電気鉄道株式会社」が敷設したもので、池上本門寺への参詣客の輸送が主なねらいでした。一九二二年(大正十一)一月に蒲田―池上間が開通、続いて翌年池上―雪ヶ谷、一九二七年(昭和二)雪ヶ谷―桐ヶ谷、一九二八年(昭和三)に五反田までが全通しました。ですから今年がちょうど池上線全通八十周年に当たるわけです。なお同社は一九三四年(昭和九)に目蒲電鉄に吸収合併されます。戦時中の一九四二年(昭和十七)には京浜急行、小田急電鉄を一九四四年には京王電軌をも合併しましたが、戦後の会社再

いのではないのでしょうか。歌詞の中に『古い電車のドアのそば...すきま風に震えて...』とありますが、確かにかつての電車は古くてあまりぱつとしませんでした。その後、ステンレスカーが登場し、車掌さんのいないワンマンカーが走るようになってきています。

その池上線、東急多摩川線ですが、今年の初め頃から『池上線開通八十周年』というヘッドマークをつけた電車や、これまでの角張ったステンレスカーに交じつて、緑色を基調に先頭が丸みを帯びた新型の電車(7000系)が走っていることにお気づきのことだと思ひます。

別会社だった池上線と東急多摩川線

今年開通八十周年を迎えた池上線ですが、ここで池上線、東急多摩川線の歴史を振り返ってみましょう。

池上線と東急多摩川線は、つかず離れず、ほぼ平行して走っており、一番近いところ(池上線「千鳥町」駅と東急多摩川線「下丸子」駅付近)では、五〇メートルほどしか離れていません。すぐ近くを二つの電車が

編成に伴い、ふたたび分離して現在に至っています。

戦争によって廃駅に

戦時中には東急線にもいろいろなことがありました。当時の目蒲線、蒲田駅と矢口渡駅の間には本門寺道駅(後に道塚駅と改称)があつたのですが空襲で駅舎が焼け落ち、結局戦後も再建されることはありませんでした。現在の東矢口三丁目31番から西蒲田八丁目12番のあたりですが、この駅が今でもあれば、蒲田西地区の住民にとつてはどんなに便利なことでしょうか。町の風景も変わっていたかもしれませぬ。また当時の目蒲線の線路は、矢口渡から蒲田間は今よりずっと環八寄りを走っていて、現在の東京実業高校のあたりから曲線を描いて今のJRの線路と平行に走り、蒲田駅とつながっていました。戦後現在のようになり直線化され、JRとはTの字型で連絡するようになりました。

いつまでも地域に愛されて

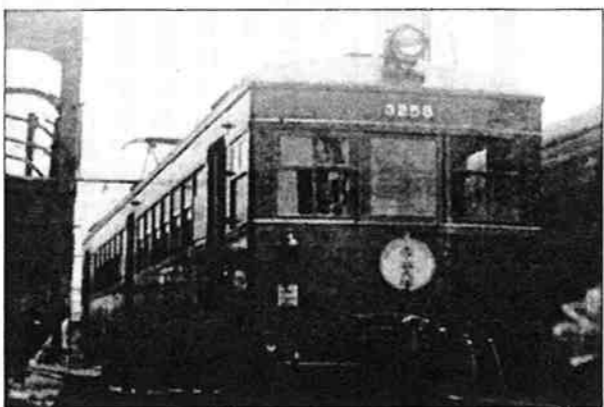
将来は、地下鉄副都心線が東急多摩川駅から東急多摩川線に羽



新型車両

通っているというのには、利用する住民にとっては便利この上なのですが、経営する鉄道会社にとっては、競合して客足の奪い合いになってしまい、決して乗車効率がよいとはいえないでしょう。

どうしてこんなことになつてしまつたのでしょうか。それは、池上線と東急多摩川線がもともと別々の会社によつて敷設、経営されていたという歴史があるからです。東急の母体となつたのは、一九一八年(大正七)経済界の長老、渋沢栄一が主唱者となつて設立された「田園都市株式会社」



昭和20年当時の戦災車両

田までつながるといふ構想もあるようです。埼玉県(和光市方面)と羽田が一本で結ばれるというのはいいことでしょう。けれども途中の東急多摩川線の各駅が通過駅となつてしまふのではないかとということが懸念されています。それでは私たち地域の住民にとってはかえつて利用しにくくなつてしまひます。少なくとも現在の運行本数を確保し、いつまでも地域の足として便利で住民に親しまれ、愛される東急線であつてほしいと願っています。

(取材 都築・多田委員)